

いうのだろう。

第一部の傷痍軍人の歌で「心の眼」という観点から信綱が選んだ歌は次のような作であろうか。

・まなかひの母は見えねどわが心にうかぶ
面影は昔と変らず

陸軍上等兵 石川芳一

・見えざれど眼帯とりて眺むれば昇る初日
が目に浮び来る

陸軍上等兵 小西章夫

・真白なる富士が見ゆると吾が戦友^{とも}のをし
ふれば吾にも見ゆる心地す

陸軍上等兵 崎村義士

・背伸びすればとどくところに絲瓜あり通
る度毎さはりて見るなり

陸軍上等兵 深澤正雄

いずれも見たいという強い心が働き、その上で「心の眼」でものを見る歌である。対象の細部に拘泥するのではなく、見えぬことで逆に対象の本質や実在に近づいている。これらの歌は「歌は心がもとである。心から生まれてこそ、歌の名に値する」、「単純化こそ写生の要諦」「単純化された結果、

かえつて、そのものの真実な心が浮き出してくる」(『短歌入門』集文館)と主張した信綱の短歌観にまっすぐに通じるものだったのではないか。信綱は視覚障害を有する傷痍軍人たちの歌にアララギの写生とは異なる対象把握の方法を見だし、それに共鳴したのである。

四、心

『盲人歌集』には「心」をうたった歌が非常に多い。第一部、第二部を合わせた短歌五〇五首中、六六首で「心」がうたわれている。「心地」「心づくし」など複合語は除く)計算すると約一一パーセント。ほぼ十首に一首の割合である。

・失明のくらきが中に馴れはてて心しづけ
き我が命かも 陸軍上等兵 石川芳一

・心冴えて眠れぬ夜のさびしさに点字さぐ
ればいよよ冴え来る

陸軍上等兵 齋藤正治

・ゆたかなる匂はなちて梅開く盲の我も心
開かむ 陸軍一等兵 山崎金次郎

・雨はれのちぎれ雲ゆく青空を言ひあて得

たり心うれしき 陸軍曹長 山本卯吉

「心」の有り様が多彩にうたわれている。『盲人歌集』は「心」をテーマにした歌集でもあるのだ。

『盲人歌集』の序文で信綱は次のように述べている。

「わがやまと歌は、肇国の古へより、日本民族の国民精神を伝へて、人の心に、力と光とを与へ、人の胸を清めもし慰めもする道である。人は自分の思を歌にのべ、もしくは他人の思をのべた歌を読み味ふと、胸の思が奮ひ立ちもし、なごみもするのをおぼえるものである。(略)願はくは、この書長く天地の間に留まり、不幸にも明を失はれた人々の為に、心の糧とも、心の燈とも、心の杖とも、心の友ともなり、また新たに歌の道に入つて心の慰藉を得られむとする諸士の為に、道のしをりとならむことを切望する次第である。」

この文章は『古今和歌集』「仮名序」を意訳したものだ。

「やまとうたは、人の心を種として、万の言の葉とぞなれりける。世の中にある人、ことわざ繁きものなれば、心に思ふ事